

[調査報告]

『保育職に必要な表現の技術を高める指導法の考察』

志茂 貴子
阿部 陽子
河野 有香

' A Study of Teaching Methods to Enhance Expressive Techniques for a
Career in Children's Education'

Takako Shimo
Yoko Abe
Yuka Kono

キーワード：アクティブ・ラーニング、表現、音楽教育、幼児、児童

Key Words : Active learning , Expression , Music Education , Infant , Childhood

要約：秋草学園短期大学では、「音楽(1)ピアノ」を1年次の通年科目として開講しており、「教職課程のための大学ピアノ教本」(以下 ピアノ教本)と「簡易伴奏による実用こどものうた」を教材として保育及び教育実習や就労後に必要なピアノの奏法、音楽の基礎知識、童謡の弾き歌いの授業をしている。しかし入学者の半数以上がピアノ未経験者という状態から卒業までの2年間で現場において通用する技術を身につけるには効率よく、また指導者と学生の意欲が一致して精進することが必要と思われる。そこで筆者らは学生が自発的、能動的に学ぶように働きかける Active Learning の観点から検証、考察することとした。

1. 研究方法

(1) 対象

幼児教育学科第 I 部 1 年生 32 名

研究期間

平成 30 年度(2018 年)4 月～7 月前期全 16 週

(2) 授業形態

個人レッスン

90 分当たり 5～6 名ずつ個々のレベルに応じた 1 対 1 の指導を個人レッスン室にて行う。

クラス授業

45 分ずつの入れ替え制によるグループで音楽理論、童謡の弾き歌い演習、先生として園生活の場の模擬体験を行う。

2. 個人レッスンとクラス授業の目的

音楽を学ぶにあたり、集団生活(幼稚園から高校授業まで)における音楽は、ほぼ『集団』で受ける一斉指導であろう。その時に取りあげられる内容は主に合唱。そして、器楽を取り入れたものが大半かと思われる。「音楽(1)ピアノ」では、数年前よりクラス単位のソルフェージュ指導と個人のピアノ指導の二本の柱で構成される授業を行っている。以前は 90 分の授業のうち、個人レッスン 20 分程の指導で、その前後の時間の使い方は学生に委ねられていた。当然個人の意識の違いにより、その授業の時間の有意義さに開きが出てくるのが否めなかったが、この授業スタイルになってからは、45 分はクラス授業・20 分は個人レッスンと授業一コマを音楽に当てられ、演奏に必要な知識をクラスと個人でトレーニング出来るようになった。クラス授業と個人レッスンとに分けたことにより、練習室の確保もしやすくなり、個人レッスン 20 分の前後の予習復習も各々取り組んでいるようで、この授業形態はかなり充実の内容になっていると思われる。歌唱に関しては個人レッスンだけよりもクラス単位で行うことで、より一体感も得られ、歌が自然に耳から入り体にも入りやすい。対して器楽は、幼少の頃の経験の有無が大変大きく、全くの初心者から、吹奏楽経験者・現在もピアノを習得している者まで幅広く、そのどの学生に対しても同じ時間でカリキュラムをこなさなくてはならないので、クラス授業の一斉指導と個人レッスンでの細やかな指導で計画的に取り組むことが非常に重要である。

3. 「音楽(1)ピアノ」における現状把握と研究結果

学生の実状と意識を把握するためアンケートを実施した。アンケートの結果、約 60%の学生が初心者であることが分かった。初心者でも入学前講座を受講した学生は、ピアノ教本の進度が経験者と並ぶほどであり数ヶ月でも早く準備を始めることに効果が認められた。本学の進学理由では、「幼稚園、保育園の両方の資格が取れるから」「2年間で資格が取れるから」81%と圧倒的に多く、「先生になりたい!」という強い希望を持って入学してきたことが窺える。初心者、経験者と個人差のある状態で2年間絶えず学習意欲を刺激するには、どのような指導をしたらよいただろうか? また「先生、先輩、親の勧め」15%、とやや自発的ではない理由で進学した学生には、保育従事者がいかに有意義な職業で、資格を取得すると将来どのような選択が出来るかを伝えるにはどのような指導をすべきだろうか、次に考察、実験を試み、検証してみる。

実験 1. ピアノを弾くために必要な読譜力とリズム感を身につける

1-1 読譜

日本語の文章を読むには、平仮名、片仮名、漢字の理解を必要とするようにピアノを弾くためにはト音記号とヘ音記号の音符を理解する必要がある。クラス授業では、毎週難易度の低い課題から高い課題へと段階を上げながら所要時間を計り読譜力向上を試みた。

結果

5月15日時点でのピアノ教本の進捗と譜読みのタイム比較すると、譜読みのタイムが速い＝ピアノ教本の進捗も早いということがわかった。4月の時点で2分以上または20個以上失点し譜読みを苦手としていた学生が、7月の筆記テストで試験用紙に大譜表を書き込み満点を取るようになった。また筆記試験の6つの項目の正当率を比べると

1. 音楽用語 95%
2. # ♭ の理解 92%
3. 音符と休符の等号 88%
4. 音符と休符の計算問題 76%
5. 記号、名称の文章題 75%
6. 譜読み 96%

と6の譜読みの正当率が一番高く理解を深めたと思われる。アンケートではピアノの譜読みが楽になったとの回答も多く、後期も希望するとの回答が75%と前向きな姿勢が見られた。今後も実習前のオリエンテーションでの急な課題や就職試験における初見演奏への対策に備えて引き続き取り組みたい。

1-2 リズム感

リズム感を学ぶときには、リズムと拍の関係性を理解させることが大切である。音符の名前・長さを理解していても、実際楽譜を前にしたときに演奏に繋がらない場合、拍の理解が不足していることが多い。全ての音楽には拍が存在すること。その拍を刻む速さでテンポが決定することを徹底的に教え込むことは常に言い続けることが必要である。拍の補助をしながら、このことを訓練することで、2分音符・4分音符・8分音符・16分音符までは習得出来る学生が多い。複合拍子で少々混乱することもあるが、左手の伴奏が8分音符のものから練習を積み重ねることでこちらも習得可能となっていく。つまずきの多いのは付点のリズムである。付点のリズムは園生活や童謡の中に多く含まれている。まずは付点のメロディーに16分音符の伴奏⇒8分音符の伴奏⇒4分音符の伴奏と分割を大きくしていく練習。これは、理論的にも理解しやすく、回数を重ねることで体得させていく。が、順番に刻みを変えることで出来ても、いきなり4分音符の分割では出来なくなる学生もいた。その次なるステップでは、言葉で言いながらリズムを刻むことも有効な練習である。リズムを唱え言葉で言いながら、または歌詞のあるものであれば歌詞をつけて歌を歌いこむ。歌うときには手でリズムを叩きながらそして拍を叩きながら歌う。可能ならばスキップしながら歌わせることも大変効果がある。歌がしっかり歌えるようになると、演奏に入ったときに演奏が付点を刻めていないと違和感を覚えるようになる。違和感を覚えられれば、正確な演奏へと繋げていくことが可能となる。それが出来たら、右手のメロディーを弾きながら歌わせる。次に左手を弾かせながら歌わせる。そして両手で弾きながら歌わせる。片手で弾きながら歌うことまではかなり出来るが、両手になると付点がなくなる場合には、背中でリズムを叩く・付点の長い音符の時だけ背中を押すなど、体でリズムを感じさせることを徹底する。ここまできて、まだ付点が不自然な場合は、自分の耳で演奏が聞けていない場合が多いので、録音して確認することも効果的である。

結果

ピアノ教本を課題とする発表では16分音符や付点のリズムなど高度な課題が弾けていたが、園生活の歌の「おべんとう」「おかえりのうた」は、付点のリズムと8分音符が複雑に絡むので正確に弾ける学生は少なかった。筆記試験では正当率76%と他の問題に比べて失点が多く、知識と実技のバランスが難しいと感じた。

実験 2. 弾き歌いのための演習

実験1にて読譜力が身についた6月の中旬にML教室にて弾き歌いの演習を実施する。課題曲は運指の簡単な「かえるの合唱」「ちょうちょう」として弾くことより歌うことに集

中出来るように配慮した。また各自で五線譜に手書きの楽譜を作成し楽譜を読むことへの苦手意識を取り除くようにした。一人ずつではなくML教室にて皆で歌うことで止まらず歌いきることと声を出すことに慣れるようにした。左手の伴奏はハ長調の3コード(C F G7)のみにして弾き歌いをしやすくした。

考察

ピアノ教本の進度が遅い学生でもこの2曲の弾き歌いは20分程で出来るようになった。逆に進度の早い学生が弾き歌いは苦手と訴えることもあった。歌うことに慣れていないため知っている歌詞の童謡や歌いやすい音域の曲を選ぶことで意欲が向上することがわかった。コードを理解できた上級者は積極的に伴奏を分散和音などにして各自工夫していた。

実験 3. ピアノ教本を課題とする実技の発表

ピアノ教本の実技発表に向けての個人レッスン。4か月程度のレッスンでの発表となるので、人前で弾くということがどういうものなのか理解させることが一番の目的であるともいえる。初心者は、普段の練習と試験とでは演奏にひらきが出てしまうことが起こりるので、弾けるようになって、片手練習や緊張を加えたレッスンを重ねる。ピアノの前に座って10秒ほど音を鳴らさせず、試験を想定させてから弾かせる。前期の発表でどれだけ曲数がこなせているかで、年度末の試験での到達度がかなり見えてくるので、この4か月の進度は大きな目安となる。経験者でも、人前での発表は緊張が加わるので、弾けるようになってもゆっくりの練習や、苦手な部分を取り出した分解練習、試験を想定させてから弾かせること、前後の学生の前で弾かせる、緊張で呼吸も浅くなるので、深呼吸を十分にしてから演奏に臨むように伝えていく。このことは、十分に練習を積んだ学生には効果的で、発表の結果も比例していたように思う。クラス全員の前での演奏により、他人の演奏を聞くことも出来、現時点での自分の課題も明確にすることが出来る。また、今後の就職試験、実際の現場では、一回限りの演奏で実力を判断される。現場では、保護者によるビデオ収録により、ピアノの弾ける先生・弾けない先生、というようなイメージが長く残る。今後止まらずに弾ききることが求められるので、その訓練にもなる。学生自身が人前での発表を体感し、後期の試験に繋げていくことが前期の発表の大きな役割である。

結果

発表は、今後の就職試験を想定し、担当する教員7名とクラス全員の前で、グランドピアノで演奏させた。演奏前は前列で待機させ、初心者にとっては、人生で初めて人前でピ

アノを弾く機会となり、緊張感のあるものとなった。また、緊張して普段のテンポより早く弾いてしまう、左手がわからなくなる、最初の弾く高さを間違えるなど想定外のことが起こっていた。日々の細やかで継続的な練習が自信となり、安定した演奏につながると体得できた。

4. 個人レッスンとクラス授業の連携における Active learning の効果があつ

た実例

1. 先生としての模擬体験

保育園や幼稚園の実習で園児を前に先生として話しかける表現と人前で弾き歌いする体験をさせることから、季節や天気などを配慮した言葉かけ、また受ける側としての感想からどのような表現が必要か学ぶ。出席番号順に予め「朝の会」「お弁当のあいさつ」「お帰りの会」に振り分けて園生活の歌、「朝のあいさつ」「おはよう」「おべんとう」「おかえりのうた」「さよならのうた」を個人レッスンで学習するようにする。

第1回 4月24日～5月22日

ピアノを弾くかどうかは個々の希望に任せて、まだ弾けないという場合は筆者がピアノを補助し、先生としての表現に集中出来るようにした。

考察

生活の歌を知らない学生が多かったので歌詞を確認した。人前に立つ恥ずかしさで何を話したらよいかかわからない様子で話す声も小さく聞き取りにくかった。回を重ねるとピアノの必要性を感じて積極的にピアノの弾くようになったが、ピアノを弾くと歌えない状態。一方、見ている側は回を重ねるごとに歌えるようになっていった。自分が園児だった頃に幼稚園の先生がしていた手遊びを実演し、楽しかった幼児体験が保育者への志望動機につながったと話す学生もいた。他の学生からの影響を受けて手遊びを取り入れる学生もあったが、手遊びのやり方を説明せず実施したので見ている側には伝わらなかった。きちんと説明をすることで双方の信頼も生まれ、有意義な「お帰りの会」となっていた。第1回終了後に「園生活においてピアノが必要と思うか？」という質問に対して、71%の学生「必要と感じた。」と答えた。

第2回

片手でもよいので自分で弾き歌いするように指示した。

考察

1回目より人前に立つことへの抵抗がなくなり前向きに取り組んでいた。右手で旋律を弾くだけでも止まらずに弾ければ受ける側は歌うことが出来たが、両手で弾いてもミスをして止まると歌いにくくなっていた。「おもほり」「運動会練習」「プール」などの設定で話しかけるようになり、「朝の会」の担当の話題を受け継いで1日の流れを作ることが出来るようになった。暑い日や運動会練習の設定の時は、水分補給を促したり早寝するように話しかける配慮がみられた。「お弁当の会」の担当では、「手を洗いましたか？」と衛生面について確認をしていた。

第3回 7月3日 弾き歌い発表1

園生活で必要とされる「おはよう」「朝のごあいさつ」「おべんとう」「おかえりのうた」「さよならのうた」の中から任意の1曲を人前で弾き歌いする。

考察

模擬体験で担当した曲に再度挑戦する学生が多く前回よりも止まることなく大きな声で歌うことが出来ていた。人前で弾き歌いすることへの抵抗は少なくなり、演奏に集中出来ていた。保育現場では多少のミスをして止まらず最後まで弾き通すことが大切であることも理解したようだった。思うように演奏できなかった学生は、次週の試験への目標を立てていた。

第4回 7月10日 弾き歌い発表2

前回と同じく園生活の歌から任意の1曲を人前で弾き歌いする。

考察

模擬体験を通じて保育者とし弾き歌いをする時には演奏に集中するのではなく、園児に視線を向けることが重要ということを理解して暗譜での演奏に挑戦する学生が多くなった。前回と同じ曲に再挑戦して完成度を上げた学生が約 30%いた。11 月の実習への準備のため全 4 回の体験で「おはよう」「おべんとう」「おかえりのうた」「さよならのうた」の 4 曲を弾き歌いした学生もあり、卒業までに園生活の歌の他に季節の歌、「となりのトトロ」や「世界中のこどもたちが」など難易度の高い曲を弾きたいと希望する学生が増えた。

まとめ

模擬体験を通してピアノの弾き歌いの必要性を理解し、卒業までに習得したい曲など目標を持たせたようだ。また演奏する技術が安定していないと歌う余裕がなく、止まってしまふ。園児たちへ目を向けながら弾き歌いするには暗譜する必要がある。学生が、自らが目指す先生を思い描けるよい機会となった。アンケートでは、「後期も続けたい」「どちらでもよい」が 75%と実習前に体験して慣れたいという意欲が見られた。一方、後期は続けたくないと答えたのはピアノ教本の進度が遅い初心者が多く、まだ人前で弾くには準備不足のようだった。

2. 個人レッスンでの事例

ピアノ実技個人レッスンでは、それぞれの進路、個性、能力に合わせてきめ細かい的確な指導が必要である。ピアノ履修歴がなく入学した学生にとっては、ピアノを弾くことに負担を感じていることが多く見受けられる。学生の心理状態に寄り添った言葉掛けや指導を配慮し、また繰り返し練習することで達成感を得られるレッスン課題などを工夫して提示する。初心者の中には、ピアノが苦手でも歌うことが得意の学生も多く、その場合には弾き歌いを早い段階から取り組むことで、苦手意識を取り除く場合もある。初心者にとっては、このような指導により、ピアノや弾き歌いに慣れ親しむことで多くの成長が見受けられた。また、中級者、上級者もその進路や個性に沿った指導を配慮し、それぞれの成長や達成感を実感させ、学習意欲を向上させることが望ましい。4 人の学生の実例を述べたいと思う。

(A さんの場合)

入学当初、履修歴のない A さんはピアノに対して非常に不安があり、その不安を解消しピアノが弾けるようになるため、クラス授業や個人レッスンを前向きに真面目に受け、毎日の練習も熱心に取り組んでいた。日々平均 1 時間以上練習しているとのことであった。しかし、左手が和音の伴奏形になり難易度が上がる頃、問題は以前明らかなった A さんの思

いつめた深刻な表情である。レッスン中も弾けない箇所を、改善点を習得しないまま、ただひたすらつまづく箇所を繰り返すようになる。このままでは成果が上がらなくますます精神的にも追い詰められるのは予想された。その頃クラス授業でも、譜読みプリントでタイムを計り始めると、合格ラインである 2 分以下であるにも関わらず、「できない。わからない。」と不安を訴えるようになった。A さんの能力や努力不足の問題ではなく、精神的な部分に原因があるのではと、A さんに胸の内を聞いてみると「レッスンや人前で演奏するとできなくなってしまおう」「他人はもっと進んでいて自分は遅れていってしまうのではないかと落ち込み焦ってしまう」「来年の実習が不安だ」など多くのストレスやプレッシャーを抱えていた。早速筆者は丁寧に話を聞き、成果が上がらないことを責めるのではなく悩みや不安な気持ちに寄り添った。さらにそれぞれの不安に対する具体的な対策(本番の緊張は経験による慣れで軽減するので失敗を恐れずチャレンジすることが大切である→失敗への恐れを取り除く声かけ、階段を駆け上がって息を弾ませ胸がドキドキした状態で練習してみる→肉体を本番と似た状態で弾いてみる、他人と競うことよりも自身の成長を目標にすることを提案する、ピアノ伴奏でミスがあっても歌でしっかりリードし流れを止めないようにする)などを指導した。クラス授業の教員と個人レッスンの教員で、A さんの真面目な性格やピアノに対してのプレッシャーなどの情報を共有、配慮し、連携の取れた指導が非常に有効だった。このようなクラス授業と個人レッスンの連携によって非常に手厚い指導を行うことが可能になった。これらの指導により、A さんも精神的に安心して取り組み、意欲を取り戻した。個人レッスンでは、苦手な箇所に書き込みをしてミスを回避する工夫や左手の和音を色分けして視覚的な効果を得る工夫を自ら行い、自主的に取り組む様子が見られた。クラス授業の弾き歌い発表 1 では、前回止まりながらだった「おかえりのうた」をミスなく、しっかり歌うことが出来た。A さんも人前で演奏することに自信がつき、喜んで成果を報告してくれた。この様に精神面でのサポートが学生の安心感や自信につながり、意欲的な学習に結びつくのではないかと考察する。これも、アクティブ・ラーニングの一例であろう。学生たちが社会に進出し保育従事者の立場になった際、自身が学生時代に心に寄り添う指導の成果を体感することは大きな収穫であり、音楽の授業を通して、技術向上はもとより人間的な成長に繋がることも期待したい。

(B さんの場合)

B さんは社会人経験者。母親が保育士であった影響もあり、どうしてもご自身も保育士を目指したいということで強い意志を持って入学してきた。他の学生より高い意識を持って常にレッスンに臨まれ、理論的に理解することも長けており掴みも早かった。クラス授業の模擬体験では、「お帰りの会」担当の際に粘土作品を持ち帰るという設定で受ける側の学生に教室の後ろまで作品を取りに行くように指示した。学習したばかりの「おかたづけ」を繰り返し弾き歌いして再び着席するまでのタイミングを計るという模範を示した。

Bさんの後、模擬体験の意義を理解した学生は多く、「保育従事者になる。」という目標を現実のものとして示してくれた。ただ1つ。付点のリズムは苦手で、付点のないリズムになってしまったり、自分の演奏の間違いに気付けなかったり、体得出来るまでにはもう少し時間を必要としている。しかし、保育従事者として何が必要なのか、ご自身がしっかり描けているので、今の自分の課題を明確に理解し、出来ないからとくよくよはしない。人生の経験値の高さが学業にも活かされていて、常に自分で練習を工夫し他の学生の手本となる姿勢を見せてくれている。

(Cさんの場合)

この学生は親や先生からの勧めで入学。アンケートでも幾つかの質問に対し、積極的に取り組みたいというよりは、なるべくやりたくないというネガティブな言葉が並ぶ。しかしながら、個人レッスンでの取り組みは極めて真面目であった。音楽を耳から取り込むタイプなため、知っている曲や音源のあるものは仕上がりまで早かった。最初の2ヶ月ほどは常に「頑張ります」と言ってコツコツ練習していた。クラス授業の譜読みでは、最初のうちは平均的なタイムだったが難易度が上がると失点が増え始めた。読譜力が弱く、いつも耳に頼ってしまうため、曲が進むにつれて「分からない」「出来ない」との発言が目立つようになる。何が分からず何が出来ないのか？聞いてみると、本人も何が分からないのか分かっておらず、一緒に譜読みをしてみるとすんなり出来ることがほとんどであった。新曲に取り組むとき、何かしらでつまずくとそこで諦めてしまう。この場合も、現段階で弾けるアレンジの楽譜を選択してレパートリーを増やす指導で意欲を高めた。自分の意志で今ここにいるわけではない場合、出来ないことや辛いことに出くわすと、どうしても向き合う前に逃げてしまう傾向がある。ただ入り口や登る道が違っても、学ぶ中で意識が変わり、最終的に目的地にたどり着ければいいのである。Cさんは3ヶ月目を過ぎた辺りから休みがちになり、前期発表前も欠席が続いたが、前後の学生にメッセージを託し、発表の日は演奏した。練習不足で理想的な演奏には届かなかったが、このくらいの練習量ではクリア出来ないということを実感できたようである。弾き歌い発表2では、「朝のごあいさつ」「おかえりのうた」を歌わないながらも暗譜して弾くことが出来ていた。実技の大切さを伝えながら、誰のためではなく自分自身のために、彼女自信が資格を取得したい・保育従事者になりたいという意欲を持てるよう引き続き導いていきたい。テクニックを教えることは勿論であるが、学生がどんな気持ちでここにいるのか、意欲の低い学生には叱咤激励するだけではなく、時にピアノから離れたところでの会話も非常に重要である。

(Dさんの場合)

次にピアノ履修者、秋草学園短期大学の附属高校出身者の例を挙げたい。Dさんは入学当初より基本的な課題を優にこなせる実力であった。当然音楽1の授業では一見問題はな

いが、授業が退屈になってしまう危険がある。実際、クラス授業での模擬体験第1回では、実力があるにもかかわらず演奏せず、自身の向上の目標と保育従事者としての指導力を導き習得しなければならない。まず、Dさんには童謡弾き歌いを5月辺りからスタートさせた。初めに生活の歌、来年度の実習曲当たる6月分の歌を履修した。その際、曲調、強弱、伴奏形の弾き方、歌を伝える伴奏法など、弾き歌いをより向上させることを指導した。例えば、生活の歌では、筆者が左手の伴奏部をスラーとやや短めに切って演奏してみせる。どちらがより曲調にふさわしいか、学生に感想を促す。自ずと曲調に合ったスタイルを選択し演奏するようになった。また、「あめふりくまのこ」では、ペダルを習得することを指導し、曲調に合った表現をする楽しさを感じていた。また、強弱記号に対する表現では「大きなたいこ」を題材に使用した。初めは強弱を明確に付けることができなかったが、まず大きな声と小さな声を発声させ強弱を体感させる。打鍵を強く、高さとスピードをかけて行う時と、撫でるように打鍵する時の違いを体感させる。など、学生自身が実感できる指導により表現力の向上が見られた。演奏表現の幅が広がったため、模擬体験第2回では「おはようのうた」を完璧に弾くことが出来た。しかし、歌うことは不慣れのようだった。保育現場において歌を覚えさせ、歌う楽しさを伝える表現力も必要であるため、歌詞を朗読し、歌を生かすよう伴奏部の音量コントロールも習得させた。その際、いずれも筆者が良い例と悪い例を模範演奏し、学生自身がどちらのほうをより保育現場でふさわしいか、判断、選択させることがアクティブ・ラーニングに繋がり重要である。このように未来の保育従事者である学生自身が弾き歌いや音楽を表現する楽しさや喜びを体感することで、学習意欲も向上し上達も顕著に見られた。また、表現力豊かな演奏を行うことでより音楽の楽しさを子供達に伝えられる。このことは、音楽が他者と共有できるコミュニケーションツールとして重要な役割を担っている。

5. まとめ

「近年では様々な問題が多発しており、厚労省の調べによれば平成20年には精神疾患のために医療機関にかかった人は323万にのぼると言われ、若年世代を含めて増加傾向にあるという。」a) 教育現場でもその傾向が見られる学生も多く、精神的不安を抱えている学生は、常に「出来ない」と連呼することも多い。演奏技術を向上させる指導は勿論であるが、学生がどのような心情でピアノに取り組んでいるのかを配慮し、一方的に欠点や努力不足を指摘するのではなく、各自の問題点を丁寧に汲み取り、個性を尊重した指導を行うことで不安を取り除き成果を得ることができる。また、学習意欲が低い学生に、時にはピアノから離れた会話をすることで信頼関係を築き、楽しく取り組める学習環境を提供することで意欲の向上が見られた。上級者も現状のレベルに甘んじるのではなく、より豊かな表現力を養う指導や、演奏をする際に必要な考え方や、音楽との向かい合い方など、幅広い視野からアプローチすることも効果的である。まずは学生に寄り添い、失敗や思いがけな

い状況に直面しても、そこで立ち止まるだけではなく、今何をすべきか一緒に考えながら、学生自ら学ぼうという意欲を持たせるように舵取りをすることが、学生達のアクティブ・ラーニングに繋がっていくのではないか。さらに、複数の教員が連携し対応する本学のクラス授業と個人レッスン2本柱の体制は、音楽の知識を広げ、技術力を向上させていくことは勿論のこと、多様な問題を抱える学生達を各方面から見守り、早急に対応することが可能となり、非常にきめ細やかな手厚いサポートができる極めて有意義で理想的な授業形態であった。

6. おわりに

今、音楽や実技にさかれる時間は減少の一途を辿っている。保育の現場は、おそらく子どもが初めて社会と繋がる場所であろう。もしかしたらそこで初めて、音楽に触れる子どももいるかもしれない。読み聞かせや外遊びなど、数ある保育の仕事の1つに過ぎない音楽ではあるが、心を豊かにする時間であってほしい。技術を身につけるということに近道はなく、積み上げた時間だけが身となり実となる。音楽を通して、人としてどうあるべきか、そしてそれを身につけさせて社会へ送り出すことが我々の今の使命である。

レッスンで使用した楽曲名（童謡）

朝のごあいさつ	高 すすむ	作詞	渡辺 茂	作曲
おはよう	増子 とし	作詞	本多 鉄磨	作曲
おべんとう	天野 蝶	作詞	一宮 道子	作曲
おかえり	天野 蝶	作詞	一宮 道子	作曲
さよならのうた	高 すすむ	作詞	渡辺 茂	作曲
かえるの合唱	岡本 敏明	(1907年生～1977年没)作詞		外国曲
ちょうちょう	作詞者不明			外国曲
あめふりくまのこ	鶴見 正夫	作詞	湯山 昭	作曲

参考文献

- (1) 池田奈々子編 書いて覚える徹底譜読1 ドレミ出版 東京 平成30年 2018年2月20日 第26刷
- (2) 池田奈々子編 書いて覚える徹底譜読2 ドレミ出版 東京 平成28年 2016年8月30日 第15刷
- (3) 鹿戸一範 根本志保 保育者養成校における音楽指導に関する一考察 平成27年 2015年 秋草学園短期大学紀要32号
- (4) 大学音楽教育研究グループ 教職過程のための大学ピアノ教本 教育芸術社 東京 平成27年 2015年11月4日 第47刷発行
- (5) 田口雅夫 高崎和子 簡易伴奏による実用こどものうた カワイ出版 東京 平成20年 2008年5月1日 第4刷発行
- (6) 丸高聡美 豊泉尚美 保育養成校における保育内容「人間関係」と「表現」の授業連携の意義について 平成29年 2017年 秋草学園短期大学紀要34号

引用文献

- a) 菅野恵理子 未来の人材は「音楽」で育てる 出版社 (株)アルテスパブリッシング・東京 平成30年2018年発行 引用文 P217 1行目～3行目